

2026年度 第1四半期決算説明資料

対象期間：2026.4.1-6.30

2026年8月5日

明治ホールディングス株式会社

(注) 以下のページの一部内容を修正しております。
・P14 不眠症治療薬「ボルズィ」の計画比

I R 部を管掌しております、CFOの菱沼でございます。

それでは、2026年度 第1四半期決算について、当社ホームページに開示しました「決算説明資料」にそってご説明いたします。

資料をご覧いただいている方は、1ページ目をご覧ください。

- **1Q 連結営業利益は226億円（前年同期比+27.7%）**
 - ・ 食・医ともに大幅増益
 - ・ 食品：カカオ原料や海外乳原料のコストアップを価格改定効果で吸収、プロバイオ、チョコレート、「ザバス」などの主力ブランドも堅調に推移
 - ・ 医薬品：主力の抗菌薬やワクチンに加え、新薬の伸長が貢献
- **食品セグメントは国内外で構造改革を積極的に推進**
 - ・ 中国でデイリー事業・BtoB事業の譲渡を決定（26年12月予定）
 - ・ 国内は冷凍食品事業の生産を終了、茨城工場の閉鎖を決定（27年3月末予定）
- **通期 連結営業利益1,000億円の達成に向けて着実に進捗**
 - ・ 円安や中東情勢による追加のコストアップへの機動的対応と、次期中計に向けた全社的な構造改革を並行して推進

まず、第1四半期の総括です。連結営業利益は226億円となり、前年を上回って着地しました。通期計画に対して順調なスタートを切れたと捉えています。

食品は、原材料コストや物流費のコストアップ影響を、価格改定効果でカバーしました。また、主力ブランドも堅調に推移しました。

医薬品は、薬価のプラス改定効果に加え、主力品や新規発売品目の数量増により、大幅増益となりました。

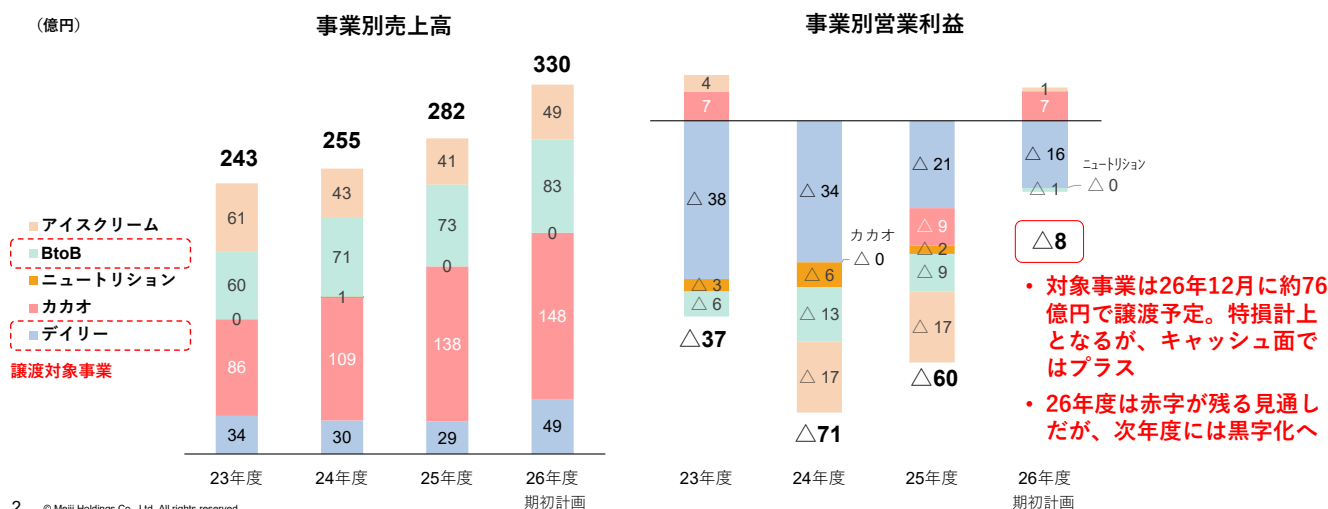
大きなトピックスは、国内外での構造改革です。

先日開示しましたとおり、中国事業の一部を現地企業に譲渡することを決定しました。また、国内では、冷凍食品事業から撤退し、茨城工場も閉鎖することを決定しました。

この2点については、次ページ以降で詳しくご説明いたします。

通期計画の達成に向けては、円安の進行や中東情勢を含む、追加的なコストアップが想定される中で、さらなる価格改定やコストダウン施策、構造改革を進め、リスク影響を最小限にとどめてまいります。そして、来年度から始まる次期中計での成長につなげてまいります。

デリー事業・BtoB事業の譲渡を決定
競争優位性のある事業に経営資源を集中し、27年度に中国事業全体で黒字化を目指す



続いて、中国事業のポートフォリオ再構築について、ご説明いたします。

7月21日にデリー事業とBtoB事業の譲渡を発表いたしました。

26年度の業績への影響は現在精査中ですが、譲渡価額は約76億円の予定で、P/L面では特損計上になる見込みです。キャッシュ面では、今年度中と2年以内の2回に分けて受領予定で、いずれもプラスに寄与してまいります。

なお、譲渡時期は12月の予定ですので、11月までの実績が取り込まれることとなります。譲渡対象事業はいずれも赤字見込みでしたので、27年度からは減益要素が減ることとなります。中国事業全体では、来期の黒字化を目指してまいります。

過去

売上成長を追う経営

- 各事業まかせの海外展開体制による、全社視点でのスピーディーな経営判断の欠如
- “総花的”な展開、非効率な資源配分
- 自社展開へのこだわり
- 市場分析・競争優位性の見極めに甘さ

厳しい事業環境の中で

「選択と集中」を断行

26年度～

資本効率と収益性を重視する経営

- 26年4月に海外事業本部を新設し、海外事業部門を集約
- 責任者にキャリア人財を配置
- 外部パートナーの活用
- 競争優位性と収益性を判断基準に、事業ポートフォリオを再構築

→低収益事業の譲渡を実行し、カカオを中心とした競争優位性の高い事業に経営資源を重点配分

そして、現在、明治グループでは経営の変革を進めています。

中国については、厳しい競争や需要の変化という外部環境要因はありつつも、変化のスピードが速い市場の中で、自社の強みの定義が不十分なまま、売上成長を重視し、楽観的な成長ストーリーを描いていた点が大きな反省点でした。

この反省に立ち、4月には海外事業の推進体制を変え、資本効率と収益性を重視する経営に転換しています。

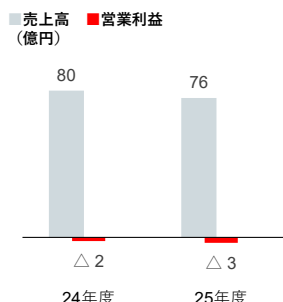
このたびの事業譲渡により、今後は競争優位性の高いカカオ事業に経営資源を重点配分していきます。

アイスクリーム事業については構造改革が続きますが、商品戦略における差別性や健康感の訴求、そして、市場にあった適正な価格戦略を重視し、主力品の数量増と限界利益拡大に取り組めます。

これらの取り組みを通じて「稼げる海外事業」の確立を目指してまいります。

茨城工場での生産を終了し、27年3月末で冷凍食品事業から撤退
成長軌道への回帰を目指し、今後も抜本的な構造改革を推進

近年の業績推移



● 背景

- 1976年から冷凍食品の生産開始
- 不採算品目の終売や成長が見込まれる品目へのシフト、コスト低減などの構造改革を進めてきたが、黒字化に至らず
→老朽化した生産設備の更新投資は困難と判断

● 見込まれる影響・効果

- 26年度
建屋の減損や設備除却などによる特別損失：20~25億円（期初計画に織り込み済み）
- 27年度以降
営業利益への影響はほぼ無し

→創出した経営資源を競争優位性の高い事業へ再配分

また、事業ポートフォリオの再構築は、中国だけでなく日本においても進めています。直近の動きとして、今年度をもって、冷凍食品事業からは撤退することを決定しました。

冷凍食品事業は、価格競争が厳しい市場において成長性と収益性に長年課題を抱えていました。品目整理などの対策は打ってきたものの、改善の目途が立たず、設備の老朽化の問題もあることから、このたびの撤退判断となりました。

なお、これによって、26年度は20-25億円程度の特別損失の発生を見込んでいますが、期初計画には織り込み済みです。

一方で、次年度以降については、販売限界利益の減少はあるものの、製造間接費も減少し、営業利益への影響はほぼ無い見込みです。

撤退により生まれる経営資源を、競争優位性の高い事業に再配分していくことで、全社的なROICの改善につなげてまいります。

2026年度 第1四半期 連結決算のハイライト

(億円)	25年度 1Q実績	26年度 1Q実績	前年同期比	上期計画 進捗率	26年度 上期計画
売上高	2,735	2,894	+5.8% +158	48.7%	5,945
営業利益	177	226	+27.7% +49	50.4%	450
営業利益率	6.5%	7.8%	+1.3pt	—	7.6%
親会社株主に帰属する 四半期純利益	100	152	+51.3% +51	55.5%	275
E P S	37.27円	56.33円	19.06円	—	101.46円

● 1Q実績：増収・大幅増益

- ・ 食品は増収・大幅増益、医薬品は売上高・営業利益ともに大幅に伸長
- ・ 四半期純利益は大幅増益。営業利益段階での増益に加えて、税金費用の減少が主な要因

では、続いて、資料5ページからは、第1四半期決算のポイントをご説明してまいります。

連結売上高は2,894億円、前年同期比5.8%増となりました。

営業利益は226億円、前年同期比27.7%増となり、食品・医薬品ともに大幅増益となりました。

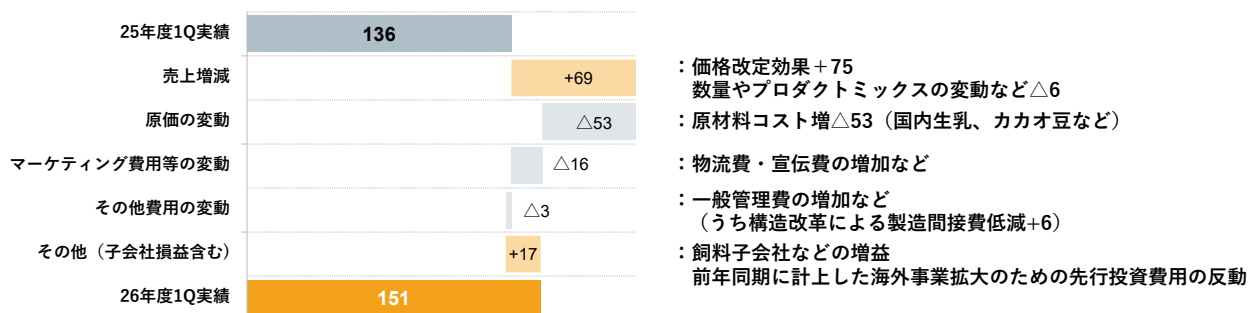
四半期純利益は152億円、前年同期比51.3%増となりました。

営業利益の増益や、食品セグメントの税金費用の減少が、主な増益要因です。

食品：2026年度 第1四半期 決算概要

(億円)	25年度 1Q実績	26年度 1Q実績	前年同期比	上期計画 進捗率	26年度 上期計画
売上高	2,248	2,339	+4.1% +91	49.9%	4,686
営業利益	136	151	+10.9% +14	47.4%	320

営業利益 増減分析



続いて、資料6ページ。食品セグメントの決算概要です。

売上高は2,339億円、前年同期比4.1%増となりました。

営業利益は151億円、前年同期比10.9%増となりました。

価格改定効果によって、原材料コストや物流コストの上昇を吸収したことに加え、主力ブランドが堅調に推移したことで、数量減によるマイナス影響を最小限にとどめました。

また、コスト面では、デイリー事業を中心に宣伝費が増加しましたが、デイリー事業やニュートリション事業の構造改革効果が増益要素として発現しています。

加えて、子会社の収益改善などもあり、セグメント全体では2ケタ増益となりました。

食品：2026年度 第1四半期 事業別営業利益 増減分析

(億円)	食品 全体	デイリー	カカオ	ニュートリ ション	フード ソリューション	その他
25年度1Q営業利益	136	60	31	31	17	△4
売上増減	+69	+23	+20	+9	+17	+0
原価の変動	△53	△9	△29	△3	△13	△0
経費等の増減	△18	△8	△2	+1	△7	△2
マーケティング費用等の変動	△16	△11	△1	+0	△4	+1
その他費用の変動 (内、研究開発費)	△3 (△1)	+3	△1	+0	△2	△3
その他 (子会社損益など)	+17	△3	△0	+0	+6	+14
増減合計	+14	+3	△10	+6	+2	+12
26年度1Q営業利益	151	64	20	37	20	8

7 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

事業別の利益増減要因をご説明します。7 ページ目をご覧ください。

デイリー事業は、プロバイオが「売上増減」のプラス23億円をけん引しておりコストアップ影響をカバーした形です。構造改革による製造間接費減を含む「その他費用の変動」のプラス3億円もあり、3億円の増益で着地しました。

カカオ事業は、「原価変動」の影響が大きく、チョコレートやグミは好調に推移したものの、10億円の減益です。

ニュートリション事業は、スポーツ栄養の回復が「売上増減」に寄与しています。また、「その他費用の変動」の中には、構造改革による製造間接費減 2億円の効果も含まれており、6億円の増益で着地しました。

フードソリューション事業は、カカオ原料などのコストアップの影響を、主力品の売上増と、中国子会社の収益改善でオフセットし、2億円の増益となりました。

食品：2026年度 第1四半期 事業概況

■ デイリー事業

(億円)	26年度 1Q実績	前年同期比	26年度 上期計画	前年同期比
売上高	675	+0.8% +5	1,392	+3.3% +44
うち、国内	664	+0.6% +3	1,366	+2.7% +36
海外	10	+18.9% +1	26	+44.9% +8
営業利益	64	+6.2% +3	138	+15.1% +18
うち、国内	70	+6.4% +4	150	+11.9% +16
海外	△6	— △0	△12	— +2

国内主力品の売上高※ (億円)

※ (株) 明治単体、収益認識基準適用前実績

	1Q実績	前年同期比	上期計画	前年同期比
プロバイオティクス	231	+3.6%	453	+2.6%
ヨーグルト	204	△0.8%	416	+1.6%
市販・宅配牛乳	197	+3.5%	420	+3.9%

■ 国内

● 市場 (1Q)

- ヨーグルト (機能性含む) : +6~7%
- 牛乳 : +3~4%

● プロバイオティクスが成長をけん引、特に市販の好調が続く (市販+5.1%・宅配△2.4%)

● 「R-1」は堅調 (+1.0%)、「ヘモグロビンA1c対策ヨーグルト」は計画比1.5倍で好調に推移

● 「ブルガリア」は前年同期並み

● 価格改定効果により、宣伝費・物流費の増加を吸収して増益を確保

■ 海外

● 中国で前年発売の「明治おいしい牛乳」が伸長

● 現地通貨ベースでは増益だが、為替影響により前年同期並み

続いて、事業別のポイントを説明してまいります。

まずはデイリー事業です。

国内では、市販のプロバイオが引き続きけん引役です。

ヨーグルトは、生産トラブルの一時的な影響があったことで、やや弱く見えますが、「HOME MADE STORY」などの付加価値品は好調に推移しています。プレーンヨーグルトは他社との価格差が詰まってくるので、しっかりとシェアを回復させたいと考えています。

食品：2026年度 第1四半期 事業概況

■ カカオ事業

(億円)	26年度 1Q実績	前年同期比	26年度 上期計画	前年同期比
売上高	436	+12.7% +49	871	+10.1% +80
うち、国内	272	+9.5% +23	510	+6.5% +31
海外	164	+18.4% +25	360	+15.6% +48
営業利益	20	△34.2% △10	43	△10.0% △4
うち、国内	24	△29.3% △10	35	△26.2% △12
海外	△3	— △0	7	— +7

国内主力品の売上高※ (億円)

※ (株) 明治単体、収益認識基準適用前実績

	1Q実績	前年同期比	上期計画	前年同期比
チョコレート	275	+8.9%	500	+5.1%

■ 国内

● 市場 (1Q)

- チョコレート：+4～5%
- グミ：+0～1%

● 「チョコレート効果」やチョコレートスナックなどの主力品が好調に推移

● グミは新商品が寄与し増収

● カカオ原料のコストアップにより減益

→カカオ原料高の影響は1Qが最大の見通し。引き続き高付加価値商品の販売拡大に注力し、原料高に対応

■ 海外

● 米国やシンガポールでチョコスナックが伸長、中国はアーモンドや板チョコが好調

● 米国での減価償却費や人件費含む製造間接費の増加により減益

続いて、資料9ページ。カカオ事業です。

国内では、チョコレートもグミも伸長し、全体で9.5%と強い売上の伸びになりました。上期中はカカオ原料高の影響が残りますが、強いトップライン成長で対応していく考えです。

海外は、いずれのエリアも主力品が好調に推移しています。

原価アップや投資先行によるコストアップがありますが、トップラインの成長を継続し、将来的な利益獲得につなげていきます。

食品：2026年度 第1四半期 事業概況

■ ニュートリション事業

(億円)	26年度 1Q実績	前年同期比	26年度 上期計画	前年同期比
売上高	309	+6.3% +18	605	△1.3% △7
うち、国内	277	+5.7% +14	550	△1.8% △10
海外	32	+12.3% +3	54	+4.5% +2
営業利益	37	+20.9% +6	68	△6.8% △5
うち、国内	37	+24.1% +7	70	△5.4% △4
海外	0	△74.6% △0	△1	— △0

国内主力品の売上高※ (億円)

※ (株) 明治単体、収益認識基準適用前実績

	1Q実績	前年同期比	上期計画	前年同期比
乳幼児ミルク・流動食	158	+0.6%	326	△2.4%
スポーツ栄養	151	+13.6%	288	+1.8%

■ 国内

● 市場 (1Q)

- スポーツプロテイン (飲料) : +21%
- たんぱく質補給食品市場は年々拡大。プロテインへの注目の高まりが中長期的な市場活性化をけん引。糖尿病治療薬関連の国内需要については引き続き注視

- 乳幼児ミルクはインバウンド縮小により減収
- 「ザバス (粉末)」は競合との売価差縮小や、新規ユーザー獲得により大幅増収
- 「ザバスミルク (飲料)」は新商品の寄与や販促強化により大幅増収
- 価格改定効果や構造改革によるコスト削減で増益

■ 海外

- パキスタン向けの乳幼児ミルクが伸長
- ベトナム子会社の減収により減益

続いて、資料10ページ。ニュートリション事業です。

国内では、乳幼児ミルクはインバウンド縮小の影響で減収ですが、スポーツプロテインは粉末タイプが復調してきており、利益にプラスに寄与しています。

ホエイ高を受けて各社とも値上げしたことで売価差が縮小し、業界リーダーとしてのポジショニングが活かしています。また、ソイプロテインを中心に、新規ユーザーの獲得も奏功しています。

また、「ザバスミルク」も大幅に伸長しています。トップメーカーとして引き続き市場成長をけん引していきます。

原料高に対しては、一部商品を6月に価格改定、9月に容量変更の対策を講じています。ニュートリション事業全体での構造改革も継続し、収益確保を目指したいと考えています。

食品：2026年度 第1四半期 事業概況

■ フードソリューション事業

(億円)	26年度 1Q実績	前年同期比	26年度 上期計画	前年同期比
売上高	499	+2.6% +12	1,066	+3.6% +37
うち、国内	459	+2.5% +11	986	+2.3% +22
海外	40	+3.4% +1	80	+22.9% +14
営業利益	20	+15.4% +2	70	+34.6% +18
うち、国内	23	△10.9% △2	74	+6.5% +4
海外	△2	— +5	△4	— +13

国内主力品の売上高※ (億円)

※ (株) 明治単体、収益認識基準適用前実績

	1Q実績	前年同期比	上期計画	前年同期比
BtoB	241	+2.5%	493	△0.0%
市販チーズ	72	+3.0%	142	+4.6%
市販アイスクリーム	138	+7.0%	325	+2.7%

■ 国内

- BtoBは業務用クリームを中心に増収
 - 市販チーズは主力のカマンベールが好調に推移
 - 市販アイスクリームは主力の「明治エッセルスーパーカップ」が好調に推移
 - 拡売費や製造間接費の増加により減益
- BtoBを含む成長カテゴリーに注力することで、ミックスの改善を通じた収益確保を目指す

■ 海外

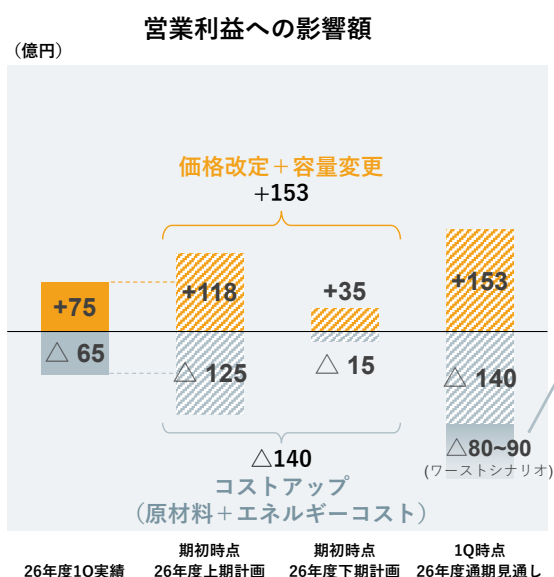
- 中国の業務用クリームが増収
- 中国で前期の減損損失計上による減価償却費の減少などにより赤字額が縮小

続いて、資料11ページ。フードソリューション事業です。

国内では、BtoBも市販品も主力品が好調です。拡売費や、北海道の新工場の償却費計上が減益要因になっていますが、主力品の成長で収益確保を目指します。

海外では、中国事業の改善が寄与していますが計画比ではやや弱い進捗です。アイスクリーム事業が課題ですので、冒頭にご説明した構造改革を継続していきます。

食品：コストアップへの対応



● 1Qの主なコストアップ

カカオ△24、国内生乳△13、海外乳原料△11、
油脂△3、糖類△1、包材△1

- カカオは、相場高騰期に調達した在庫の使用が進み、下期からはコストメリットに転じる見込み
- 円安進行の影響で、輸入原材料は全般的に上昇傾向

円安、中東情勢、海外乳原料の高騰影響による追加コストアップのワーストシナリオ

- ・ 追加コストアップのうち一部は1Q実績に発現済
- ・ まずは配合変更を含むコスト削減や、収益性の高い商品の数量増でコストアップ影響をカバー
- ・ 必要に応じて価格改定や容量変更などの施策を講じることで、通期計画の達成を目指す

次に、コストアップへの対応についてご説明します。

左上のグラフのとおり、コストアップ額は徐々に落ち着いており、第1四半期も価格改定効果でカバーできています。ただし、為替は円安が想定以上に進行している状況です。

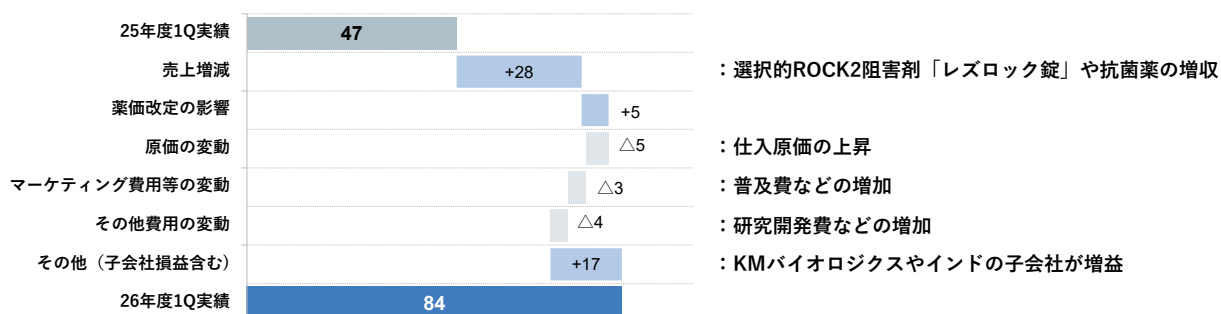
期初に、中東情勢の影響として、包材や物流コストなどを中心に、最大100億円の追加コストアップの見通しとご説明しましたが、中東影響に加えて、為替や海外乳原料の上昇なども含めた直近の見通しでは、通期で最大80-90億円のコストアップと見込んでいます。上期はそのうち30億円程度と見ており、一部は第1四半期ですでに発生しています。

これに対しては、まずは配合変更を含むコスト削減や主力品の増売でカバーします。今後の追加コストアップのリスクは織り込みつつも、現時点では対応可能と判断しており、必要に応じて価格改定や容量変更などの施策も厭わず講じることで、通期計画の達成を目指します。

医薬品：2026年度 第1四半期 決算概要

(億円)	25年度 1Q実績	26年度 1Q実績	前年同期比	上期計画 進捗率	26年度 上期計画
売上高	490	556	+13.6% +66	43.9%	1,267
営業利益	47	84	+76.3% +36	52.3%	161

営業利益 増減分析



続いて、資料13ページ。医薬品セグメントの決算概要です。

売上高は556億円、前年同期比13.6%増となりました。

営業利益は84億円、前年同期比76.3%増となりました。

国内・海外ともに、主力品が好調に推移したことに加え、薬価の下支え効果もあり、新規発売品の普及費や研究開発費の増加を吸収して、セグメント全体では大幅増益となりました。

医薬品：2026年度 第1四半期 主要領域別概況

(億円)		26年度 1Q実績	前年同期比	26年度 上期計画	前年同期比	1Qのポイント
国内事業	感染症領域※1	115	+28.1% +25	238	+16.9% +34	薬価の下支え効果含む
	スルバシリン	35	+23.8% +6	70	+2.4% +1	
	タゾビベ	29	+53.9% +10	61	+37.5% +16	
	メイアクト群	14	+32.3% +3	27	+19.6% +4	
	免疫炎症領域※1	76	△5.6% △4	142	△4.0% △5	販売切替時の一時的な減 処方機会の拡大で伸長 不眠症治療薬 「ボルズィ」は計画比1.2倍
	血漿分画製剤	29	△37.3% △17	82	△5.8% △5	
	レズロック	34	+71.0% +14	49	+15.9% +6	
	中枢神経系（CNS）領域※1	50	+4.0% +1	93	△8.9% △9	
	ジェネリック医薬品※2	75	+34.7% +19	143	+29.6% +32	日本脳炎ワクチン 「エンセバック」好調
	ヒト用ワクチン	48	+27.0% +10	245	+6.8% +15	
ワクチン・ 動物薬事業	インフルエンザワクチン	△7	— △0	172	+3.0% +4	インド子会社好調
海外事業		170	+11.7% +17	357	+9.6% +31	

14 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

※1 各領域のジェネリック医薬品含む
※2 各領域に含まれないジェネリック医薬品のみ

続いて、資料14ページ。領域別の状況について説明いたします。

感染症領域は、薬価の下支え効果と昨年度の抗菌薬の市場低調の反動もあり、大幅な増収となりました。

免疫領域について、「レズロック」は引き続き高い成長率ですが、血漿分画製剤は減収となりました。

今年度から血漿分画製剤「ベニロン」の販売を帝人ファーマからMeiji Seika ファルマに移管しましたが、4月の切り替え時に流通在庫が想定より多く残っていました。そのため、立ち上がりが弱く見えますが、在庫消化が進んでいますので、第2四半期以降は計画に沿って進捗していくと見ています。

CNS領域では不眠症治療薬「ボルズィ」が、ジェネリック医薬品は販売承継したオーソライズド・ジェネリックが、また、ヒト用ワクチンは日本脳炎ワクチン「エンセバック」が、それぞれ増収に寄与しています。

このほか、海外子会社は為替のプラス影響も含めて、好調に推移していますので、第2四半期以降も医薬品セグメントはトップライン成長と利益成長を目指します。

2026年度計画：上期・通期ともに変更なし

(億円)	25年度実績		26年度計画			
	上期	通期	上期	前年同期比	通期	前期比
売上高	5,748	11,736	5,945	+3.4% +196	12,120	+3.3% +383
営業利益	409	933	450	+9.9% +40	1,000	+7.2% +66
営業利益率	7.1%	7.9%	7.6%	+0.4 pt	8.3%	+0.3 pt
親会社株主に帰属する当期純利益	214	350	275	+28.0% +60	625	+78.2% +274
EPS	79.27円	129.42円	101.46円	+22.19円	230.61円	+101.19円
1株当たり配当金	52.50円	105.00円	55.00円	+2.50円	110.00円	+5.00円
総還元性向	—	81.1%	—	—	—	—
ROE	—	4.6%	—	—	8.0%	+3.4 pt
ROIC	—	7.8%	—	—	8.0%	+0.2 pt
設備投資額	381	1,037	530	+39.2% +149	1,290	+24.4% +253
営業CF	△94	565	—	—	1,030	+82.2% +464
フリーCF	△483	△538	—	—	△170	— △368

15 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

以上、決算のポイントをご説明いたしました。

冒頭にお伝えしたとおり、第1四半期は順調なスタートを切ることができました。

中国事業の一部譲渡による影響は現在精査中であり、また、食品セグメントの追加的なコストアップリスクはありますが、両セグメントともに主力品・主力事業がしっかりと成長していますので、現時点では期初計画の数値に変更はありません。

引き続き、営業利益1,000億円の達成と、経営の変革にまい進してまいります。

以上で私からの説明を終わります。ご清聴ありがとうございました。

参考資料

2026年度 第1四半期 連結営業利益増減分析

(億円)	連結		食品	医薬品	他
25年度1Q実績	177		136	47	△7
売上増減	+97	*1	+69	+28	—
薬価改定の影響	+5		—	+5	—
原価の変動	△59	*2	△53	△5	—
経費等の増減	△26	*3	△18	△8	—
その他（子会社損益含む）	+32		+17	+17	△2
26年度1Q実績	226		151	84	△9

*1： 価格改定効果を含む

*2： 主な内訳 【食品】 原材料コスト増（国内生乳、カカオ豆など）△53
【医薬品】 仕入原価の上昇△5*3： 主な内訳 【食品】 マーケティング費用等の変動△16、その他費用の変動△3
【医薬品】 マーケティング費用等の変動△3、その他費用の変動△4

食品：2026年度 第1四半期 海外事業概況

■ 地域別

(億円)		26年度 1Q実績	前年 同期比	26年度 上期計画	前年 同期比
中国	売上高	68	+14.1% +8	153	+26.8% +32
	営業利益	△10	— +7	△11	— +23
アジア	売上高	92	+42.4% +27	164	+15.7% +22
	営業利益	4	△31.8% △2	6	△28.9% △2
欧米	売上高	100	+9.7% +8	209	+7.1% +13
	営業利益	1	△76.4% △3	9	+7.1% +0
海外計	売上高	245	+14.9% +31	522	+17.4% +77
	営業利益	△12	— +13	△10	— +24

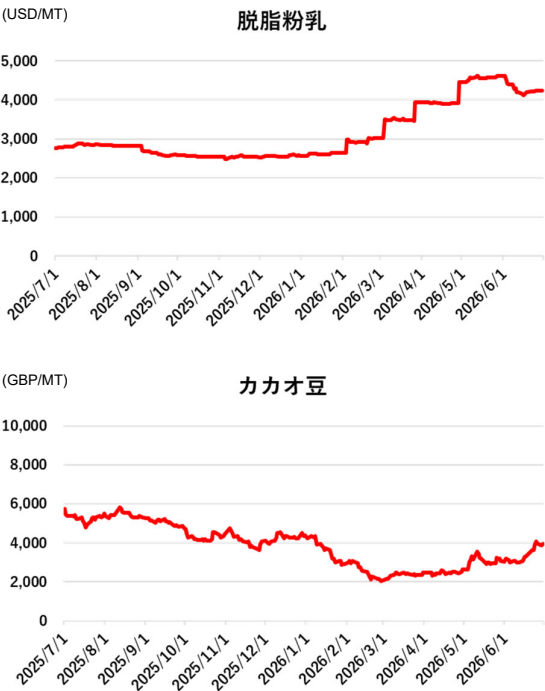
■ 中国事業

(億円)		26年度 1Q実績	前年 同期比	26年度 上期計画	前年 同期比
売上高		68	+14.1% +8	153	+26.8% +32
デイリー		10	+19.2% +1	24	+48.8% +8
カカオ		21	+31.2% +5	57	+25.7% +11
ニュートリション		0	— △0	0	— +0
フードソリューション		36	+5.0% +1	70	+21.4% +12
営業利益		△10	— +7	△11	— +23
デイリー		△4	— △0	△8	— +2
カカオ		△5	— +1	△1	— +6
ニュートリション		△0	— +0	△0	— +1
フードソリューション		△1	— +5	△1	— +14

食品：2026年度 第1四半期 主力品の売上動向

(億円)	25年度 1Q実績	26年度 1Q実績	前年同期比	上期計画 進捗率	26年度 上期計画
プロバイオティクス ヨーグルト	223	231	+3.6%	50.9%	453
ヨーグルト	206	204	△0.8%	49.1%	416
市販・宅配牛乳	190	197	+3.5%	47.0%	420
チョコレート	252	275	+8.9%	55.0%	500
乳幼児ミルク・流動食	157	158	+0.6%	48.5%	326
スポーツ栄養 (ザバスミルク含む)	133	151	+13.6%	52.4%	288
BtoB	235	241	+2.5%	48.8%	493
市販チーズ	70	72	+3.0%	50.8%	142
市販アイスクリーム	129	138	+7.0%	42.5%	325

主要輸入原料相場の動向



医薬品：2026年度 第1四半期 事業別営業利益 増減分析

(億円)	医薬品 全体	国内	海外	ワクチン・ 動物薬
25年度1Q営業利益	47	43	22	△18
売上増減	+28	+24	+1	+2
薬価改定の影響	+5	+5	—	—
原価の変動	△5	△4	△1	△1
経費等の増減	△8	△5	△3	+1
マーケティング費用等の変動	△3	△4	△2	+2
その他費用の変動 (内、研究開発費)	△4 (△3)	△1	△2	△1
その他 (子会社損益など)	+17	△3	+9	+11
26年度1Q営業利益	84	60	28	△4

医薬品：2026年度 第1四半期 事業別概況

■ 国内事業

(億円)	26年度 1Q実績		26年度 上期計画	
		前年同期比		前年同期比
売上高	317	+15.3% +42	618	+9.2% +52
営業利益	60	+38.3% +16	83	△14.3% △13

- 売上高
 - ・ 抗菌薬が前年の市場低調の反動や薬価の下支え効果により増収
 - ・ 「レズロック錠」は処方拡大が継続
- 営業利益
 - ・ 増収や薬価の下支え効果により大幅増益

■ 海外事業

(億円)	26年度 1Q実績		26年度 上期計画	
		前年同期比		前年同期比
売上高	170	+11.7% +17	357	+9.6% +31
営業利益	28	+26.6% +5	28	△30.4% △12

- 売上高
 - ・ 為替影響に加え、インドの子会社が増収
- 営業利益
 - ・ インドの子会社の増収や原価率低減により大幅増益

医薬品：2026年度 第1四半期 事業別概況

■ ワクチン・動物薬事業

(億円)	26年度 1Q実績		26年度 上期計画	
		前年同期比		前年同期比
売上高	68	+10.6% +6	290	+5.0% +13
営業利益	△4	— +13	49	+883.9% +44

- 売上高
 - ・ 日本脳炎ワクチン「エンセバック」や5種混合ワクチン「クイントバック」が伸長
- 営業利益
 - ・ 増収により営業損失縮小

医薬品：開発パイプラインー1

	製品名／開発コード（一般名）	薬効分類・適応症	ステージ						備考
感染症	OP0595（ナキュバクタム）	カルバペネム系抗菌薬に耐性が考えられるグラム陰性菌による各種感染症（β-ラクタマーゼ阻害剤）	日本	I	II	III	F	A	自社創製
			海外	I	II	III	F	A	
	コスタイベ筋注用	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の予防（12～17歳・自己増幅型mRNAワクチン）	日本	I	II	III	F	A	提携：CSL Seqirus社（米国）
	KD-414	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の予防（小児・不活化ワクチン）	日本	I	II	III	F	A	
	KD2-396	百日せき菌、ジフテリア菌、破傷風菌、ポリオウイルス、ヘモフィルスインフルエンザ菌b型、B型肝炎ウイルスによる感染症の予防（6種混合ワクチン）	日本	I	II	III	F	A	
	KD-382	デング熱の予防（弱毒生4価デングワクチン）	海外	I	II	III	F	A	
がん・血液・血	注射用レザフィリン/ME2906（タラポルフィンナトリウム）	子宮頸部上皮内腫瘍（CIN）（光線力学的療法（PDT）用剤）	日本	I	II	III	F	A	
	ハイヤスタ錠/HBI-8000（ツシジノスタート）	切除不能または転移性悪性黒色腫（メラノーマ）治療薬（HDAC阻害剤）	海外	I	II	III	F	A	共同開発：HUYABIO International社（米国）
	KD-380（10%液状人免疫グロブリン）	慢性炎症性脱髄性多発根神経炎（CIDP）患者及び多巣性運動ニューロパチー（MMN）患者の急性期治療、維持療法（血漿分画製剤）	日本	I	II	III	F	A	
	KD-416（血液凝固第X因子製剤）	血液凝固第X因子欠乏症患者の出血傾向の抑制（血漿分画製剤）	日本	I	II	III	F	A	自社創製

※「ステージ」は開発品目の進捗段階を示しています。I、II、IIIは臨床試験のフェーズ、Fは製造販売承認申請、Aは製造販売承認取得を表しています。

医薬品：開発パイプラインー2

	製品名／開発コード（一般名）	薬効分類・適応症	ステージ						備考
免疫炎症	レズロック/ME3208（ベルモスジル）	慢性移植片対宿主病（cGVHD）治療薬（選択的ROCK2阻害剤）	海外	I	II	III	F	A	承認（韓国・台湾・タイ）
		小児慢性移植片対宿主病（cGVHD）治療薬（選択的ROCK2阻害剤）	日本	I	II	III	F	A	
		慢性移植肺機能不全（CLAD）治療薬（選択的ROCK2阻害剤）	日本	I	II	III	F	A	
	IMULDOSA/DMB-3115（ウステキヌマブ後続品）	尋常性乾癬/関節症性乾癬/クローン病 /潰瘍性大腸炎治療薬（バイオ後続品）	海外	I	II	III	F	A	共同開発：東亜ST株式会社（韓国）／導出先：Intas Pharmaceuticals Ltd.（インド）
			日本	I	II	III	F	A	
	ME3183	乾癬治療薬（PDE4阻害剤）	海外	I	II	III	F	A	自社創製 市場環境を踏まえて開発計画を再検討中
		乾癬治療薬（PDE4阻害剤）	海外	I	II	III	F	A	自社創製 欧州委員会（EC）において希少疾病用医薬品指定
	ME3241	自己免疫疾患治療薬（抗PD-1アゴニスト抗体）	海外	I	II	III	F	A	共同研究：神戸医療産業都市推進機構

※「ステージ」は開発品目の進捗段階を示しています。I、II、IIIは臨床試験のフェーズ、Fは製造販売承認申請、Aは製造販売承認取得を表しています。

医薬品：開発パイプラインー 3

	製品名／開発コード（一般名）	薬効分類・適応症	ステージ	
動物薬	ボビスアントアカバネ/KD-412	ワクチン（牛）	発売（日本）	2025年10月1日発売
	フルニキシン注「meiji」 /MD-22-3002	抗炎症剤（牛、豚、馬）	発売（日本）	2026年1月6日発売
	ME4305	抗菌性製剤（牛）	申請（日本）	自社創製
	MD-22-1001-1	抗菌性注射剤（牛）	申請（日本）	
	ME4406	飼料添加物	開発中	

健康にアイデアを
meiji

- ・本資料は投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。銘柄の選択、投資の最終決定はご自身でご判断をお願いいたします。
- ・本資料に記載された業績見通しなどの将来に関する記述は、当社が現在入手している情報、および合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績などはさまざまな要因により大きく異なる可能性があります。
- ・本資料には、監査を受けていない参考数値が含まれます。
- ・本資料には、薬品（開発中の製品を含む）に関する情報が含まれておりますが、その内容は宣伝広告、医学的アドバイスを目的としたものではありません。